

Shiripaの星

北星学園余市高等学校同窓会誌



まさかの母校で ダンス教師!!

岸本 抄緯 (三七期)

私は十三年前に第三七期として北星学園余市高等学校に入学し、今は無き友星寮に居住した。

中学生の頃、教師への暴行事件をはじめ、傷害、器物破損、窃盗などで警察に何度も捕まり、中学三年生の頃においては、学校から登校禁止を言い渡され、市もそれを受理した。

中学生ながら、知り合いのトラックの助手としてバイトを始め、夜は飲み屋でも働いた。

もちろん成績はオール一。行ける高校は地元では通信ぐらいしか行ける場所が無く、自分自身も高校には進むつもりは無かった記憶がある。

ある日、母親が北星余市のパンフレットを持ってきた。「たった一人見知らぬ土地に住む」ということを受け入れるには、然程時間はかからなかった。



「親も自分がいるとやっかいだろう」という気持ちが真っ先に現れたことが一番の理由だった。

入学してからも色々問題を起こし、謹慎に入った。謹慎数は歴代の中でも断トツと当時の担任の先生から聞いたことがある。

それでも、寮の仲間や、クラスのお陰で楽しく生活できた。

正直、思い出したくない出来事や恥ずかしい経験は沢山あるが、それ以上に感動したり楽しんだりした記憶が多い。

ダンスと出会ったのも、自分の人生を大きく変えた出来事だと思う。

今、現在ダンスのインストラクターをやりながら、様々なアーティストの振付、バックダンスを行ったり、先日行われたダンスバトルでは北海道代表に選ばれたり、ダンス活動の幅は広まっている。

そして驚くことに、私は今、北星余市にてダンスの授業を持たせて頂いている。

散々迷惑をかけたこの学校にまさか先生として戻ってくるとは思わなかった。

当時の担任の田中先生、小野澤先生と一緒に仕事の話をのちになる。

恐らく、お二人もそうだろう。

私は本当に、この学校にお世話になったと心から思える。

ありきたりな言葉だけど、友人、先生、寮母さん、家族には本当に感謝している。

色々な人に迷惑をかけた分、これからの長い人生で少しずつ恩返しが出来ればと思う。



年十月、大阪に勤務していた私に突然その辞令はやってまいりました。

『十一月一日付で札幌営業所勤務を命ずる』

最初は冗談ではないかと頬をつねったり、人事部へTELしたり...しかも十一月に入籍、昨年一月に挙式を控え、更に新妻の妊娠も判明...式の準備に追われ、新居の検討も...と慌ただしい中、あまりに突然の、しかも第二の故郷、北海道への転勤！それは驚愕の辞令でありました。

結局、一昨年十二月に配属、一月に大阪にて挙式を終え、妻を残し単身北海道へ。現在は札幌市中央区に在住致しております。

六月に長男が誕生、九月から育児休暇を取得した妻が子供を連れ、やっと新婚生活をスタートさせました。ようやく家族で外出できるようになり、先日ニセコへも家族で足を運んでまいりました。

札幌転勤後、北星余市高校へも三度ほど訪ねさせていただき、安河内校長始め懐かしい教職員の皆様との再会を果たしたところでございます。

またお世話頂いた当時担任の武村先生、下宿にてお世話になりました鈴木様とも再会でき、こんな奇跡も人生で起こり得るのだと感激しております。

またいつ北海道を離れるかわかりませんが、その時まで新しい視野と家族で北海道を満喫したいと思います。



今年創立五十周年を迎えられるとお伺い致しました。微力ながら何かお役にたてればと考えております。

染色とともに

二九期 落合 紅



先生方、皆様、お元気ですか？ 私は今、石川県の珠洲市に住んで毎日元気にやっています。私の住む所は、能登半島の先端にあつて、日本で一番人口の少ない市です。

そこで私は、自然の色を布に染め上げる仕事をしています。昨年「手染めや椿姫」というブランドを立ち上げました。

私が主に使うのは天然染料と言われる、そこら辺に生えている、草や木、木の実などで、媒染剤と呼ばれる金属を使う事で、色んな色が出せます。自然から出る色は、実に豊かで、化学染料とは違う独特な暖かみがあり、染めながらいつもその豊かさに驚かされています。やっているうちに私は、染色をする際、人が捨ててしまうタマネギや栗の皮、畑や里山で厄介者扱いされている葛の葉や、外来植物で染めることに魅せられてしまいました。みんなが、いらなくなるとか厄介だと言っているのを聞くと、つい「いえいえ、違うんです。この子達にも良い所があるんです」と思つて貰つて来て染めて、「ほら、こんなに良い色が出るんですよ」とやってしまいます。それは、もしかすると北星余市で過ごした三年間が影響しているのかもしれない。

私は北星で先生や友人に、本気で人と関わることや、人を思いやる事、また、世の中には色々な人がいて、色々な考えがあり、物事は視点を変えれば全然違うものに成る事を教わった気がします。あの三年間の気さくの中に有る独特の熱さが懐かしいです。

私の住む珠洲市は、他の田舎と同じように過疎化と高齢化が、問題になっています。北星で学んだ事を生かして、ここで人と関わりながら、染色を通じて、色々な視点から里山の良さや自然の豊かさを沢山のの人に伝えて行けたらと思っています。



<https://www.facebook.com/tsubakihime.noto>

空模様を眺め、大降りの雨でなければ散策に出かける。小樽公園であつたり、旧手宮線であつたり。花や木の移ろいが、ことのほか楽しい。カメラにおさめ、相棒との花談義もいいものだ。

小さい頃、野原で育ったせいかわ、知っている雑草や木にであうと、名前を知りたくなつて、図鑑と首つびきになる。時には、インターネットで調べる。何時間かけても私の時間だから、気のすむまで見続けていられる。この時の何と至福なことか。そして、名前が分かつとより親しみを増して、声をかけながら花や木と話をします。とりわけ、コンクリート突き破つて芽をだすオオバコやよく目を隠らなければ見逃しそうな黄色の小さなカタバミなど、「良く頑張ってくれて！」と声をかけなくなる。

今は、萩やノコンギクが盛んだが、道端に葉もないのに薄紫の大振りの花だけがドーンと目に飛び込んでくるイヌサフランは、春になつてからようやく葉が出るという変わり種。その美しい色合いに目が奪われる。

葉室麟の『橘花抄』の中にこんな文章があつた。「花の美しさは、生き抜こうとする健気さにある」と。いたく心に残つた。

花と木と私

教員OB 久保田直子



◀花の終わった庭にイヌサフラン（別名・コルチカム）



▶旧手宮線沿いに枝垂れるようにして咲く萩

余市を離れて、早や六年。朝四時過ぎから五時には目が覚めるのは、北星時代の産物か。

北星余市 無限の 愛と可能性の光

二三期 小川 基



僕が北星学園余市高等学校を卒業生してから、二十年以上の年月が流れ、僕はやっと光を見つけ、やっと自分の中の北星余市を卒業した。

在学中のヘナマズルイ僕は策士だった。アイヌの血を引く僕は、アイヌの行事があると嘘をついては学校をサボっていた。アイヌの行事だと言うと、奥野先生は何の疑いもなく学校を休ませてくれた。この場を借りて謝ります。嘘付いてすみませんでした。

三年生の時期に当然のように進路で悩み、アイヌの学生を受け入れる準備をしていた沖縄大学を僕は選択した。なんせアイヌのいない世界に行きたかった僕は、またもや、ヘナマズルイ策を立てた。なんせ、学校推薦がなければ合格できない。当時の先生達に僕がアイヌとして頑張るんだ！と言うと喜んでくれる事も僕は確りリサーチしていたので、そのような事を言っちょこつと勉強し推薦と合格を手にした。だが僕の中に沖縄で学びたいとか成長したいと言う気持ちも無く、ただアイヌのいない土地でアイヌから解放されたかっただけだった。

涙の卒業式の後、僕は沖縄へ飛んだ。入学式から遅刻し、僕は父兄席に座り式を見学していたのだが、僕より遅くきた年上の新入生が僕の隣に座り話しかけてきた。彼とは直ぐに意気投合し、僕が沖縄にいた全ての時間を

共有していたかも知れない。大学には入学したが、学校には行かずに、夜の世界を彷徨い徘徊していた。そこには、沖縄と言う僕が今まで体験した事のないディープな沖縄が僕の前に現れ広がって行った。その時期はバブルの後期で湾岸戦争であった。米兵と島の人達が入り乱れ、何処かで常にバイオレンスが起きていた。僕達もBARを始めたたり潰したり、そんな生活だった。もちろん学校には行かずに生活は荒んでいた。そんな時、音楽活動をした僕の前に、当時の沖縄で世界的なミュージシャンが僕の前に確りと現れてしまった。彼等に出会い僕は初めて胸を張って、僕はアイヌです。と言える様になった。彼等と悩み苦しみ何かを探す生活は刺激的だった。そして、当然の様に学び方を知らない僕は大学が嫌いになり近づくなくなっていた。そんな時期に、あるミュージシャンから、よう基、アイヌの唄を聞かせてくれませんか？と問いかけられ、僕は、えっ？ 知らんよ、そんな唄！と答えると、彼は激怒し僕に向かって来た。唄も唄えないで、何がアイヌだ！ お前なんかアイヌじゃない！と怒やされた。その言葉はなんの間違いもなくその通りだった。僕は珍しく我に帰り、自分の荒んだ生活を終わりにしたいと真剣に考えた。僕はヘンテコリンなバンドを組んで、沖縄から北海道へ帰る事を選んだ。大学の単位は一つも取らず、退学届も出さずに、北海道へ逃げるように、ヘンテコリンなバンドと帰って来た。ヘンテコリンなバンドは方向性が見えずに荒んだツアーを続け、北星余市でのLIVEを迎えた。弱い僕は朝まで酒を煽り、酷い状態で北星余市でのLIVEに臨んだ。僕はこれでもう北星余市には顔向けできないんだなと思った。失敗を起こし、その失敗から逃げたい僕はそう思っていた。卒業してまで、北星余市の先生達の愛にドロ



を塗った事から僕は逃げようとしていた。そんな僕の北海道での生活は今までの様に荒んだものだった。何をやっても上手く行かない、失敗の連続から、ドンドン自分を見失う生き地獄が続いた。闇の中で自分がアイヌとして生きて行けるのか？ ただただ悩ま苦しんだ。僕が出来るただ一つの事はアイヌ文様の切り絵だけなんだ、と言う事に気付くのに長い時間がかかった。今、僕はアイヌ文様の切り絵をやっと光を見つけ闇から這い出て来た。這い出て来た。そして先日、北星余市の学園祭で二十年振りにトンコリの演奏をさせてもらい、やっと僕の中の北星余市を卒業できた。長い時間がかかったが、卒業できた。多くの失敗は僕が成長する為の試練だった。生き地獄から這い出て、人に感謝を言える様になった。僕は今、人の何倍も遅い成長期をやっと迎えた。今まで傷付けた多くの人達に、すみません、と、感謝を言える人間に僕はなりたいた。そんな気持ちで楽しく精一杯アイヌとして今、ここで生きている。

北星学園余市高等学校は無限の愛と可能性の光に溢れている。北星余市を卒業し感じている事である。

やっぱり走り続けます！

教員OB 奥田 あけみ



突然の退職に多くの方から驚かれ、聞われましたが、退職したこの間は実家の農家を手伝いながら、北星余市の教師という目線だけでは無い日常を、新鮮に感じながら過ごしています。しかし、生徒が二人農家に仕事に来

ていたり、行事に参加したりと完全に切り離されず、まだ北星の余韻に浸っていた日々でもありました。

改めて振り返ると、私という人間が二十七年北星余市で勤務して、自分が出会った生徒一人ひとりと向き合い、失敗したこと、問われたこと喜び合ったこと、教員間での討議(闘技！)で鍛えられたことや励ましあったことが私の支えであり、成長させてもらったことをかみしめています。それが今私の財産になっていることは間違いありません。

退職後PTAOBの方から声をかけられ「北オーフの会」に入会させていただきました。送られてくる通信や活動のパワフルなこと。改めて全国にOBの方が親として、卒業生として、今も北星余市と教育に関わっていらっしゃる方の多いことに感動します。何歳になってもどんな立場でも人の中に飛び込んで援助したり、自分も刺激を受け活動したり。「人は人の中で育つ」北星は世代を超えた教育現場であるのだと確信しますね。

さて、私も北星を離れた現在、時の流れや環境の中で巡ってくる機会に身を任せようと思っっているうちに、小学校の学童保育の仕事を始めました。どうやら子供たちとは離れられないようです。どのような形にしろ今後にもまれて、年齢や立場を超えて私なりの成長を遂げていきたいと思っています。今後とも、共にOBとしてよろしく願っています。

まさかの札幌在住！

二三期 岩谷 直樹



卒業後社会に採まれ二十一年が経過した一昨

本校は、今年開校五十周年を迎えます！

北星学園余市高等学校長 安河内 敏



つながりを求めて、全国を回りはじめて三年。最初は学校外で子どもや、若者を支援している方たちが、どのような仕組みで、どのような仕事をしているのか、わからない事だらけでした。そして徐々に学校の周りが見えてくるにつけ、これだけ「居場所」があるのであれば、本校の役割はもう無いのかもしれないと考えてしまうほど様々な取り組みが官・民間問わずなされているのです。

しかしながら、いじめの問題や体罰、虐待、自死、ひきこもり、家庭の不安定化、仕事が続かない、仕事が無い：など相変わらず子どもたちの周りには厳しい状態が存在しています。こうした事を考えたとき、世の中に出ている卒業生たちはいったいどのように生き

ているのだろうか、そして本校の教育がどのように影響したのだろうか？と改めて客観的に考える事が必要になってきました。「卒業」を目的化していなかったか？

教員も含め弾力性のある生き方こそ身に付けるべきなのでは？と五十周年を機に次の時代を見据えた捉えなおしが必要だと感じています。同窓生の皆さんにお願いした、卒業生アンケートもその一つです。一六期の卒業生の方がアンケートだけでは足りない、学校を訪問してくださり、今、社会に出たときに必要な力についての意見を寄せてくださるという場面もありました。（ご協力ありがとうございます。あっ忘れていたという人はこれからでもいいのでお願いします）これも北海道大学を始め、外部の協力を得ながら丁寧（数値を出すだけではなく）分析していきます。

こうした次につながる活動のために五十周年記念事業へのご寄付もなにとぞよろしくお願いいたします。



先日、二十年振り位に行った北星余市の学園祭。僕はPTAのエネルギーにかなりブッタマゲました。生徒より熱いPTAなのね！ すごいと驚きながら、無限の愛と光を感じました。それと、生意気ですが、教員の人数が余りにも少ないと勝手に感じたのです。北星余市の教育に必要な教員のチームワークが、教員の人数が少なく出来ていないんじゃないか？と会場にいて感じたのです。そこで閃きました！ 今、多くの

PTAや卒業生がFacebookで繋がり支えあっているのを感じています。そこで、Facebookを使って学校のために商売をして、その利益が学校に入り、教員を採用し、現在の職員の負担を少しでも軽減できないだろうか、閃いたのです。全国のPTAや卒業生には多くの販売出来る物があるかも知れないし、レトルトパックされた北星汁なんて、卒業生は購入するんじゃないか？ 卒業後、道に迷った卒業生の社会参加の場としても活用方法はあるんじゃないか？ そんな事を思いました。そんな事もこれから話し合っ行けたらと思います。このエネルギーで何かを生む事ができたら最高です。

二三期 小川 基

編集後記

長女が東京の大学に進学してから2年、今年の春から二女が京都の大学に進学することが決まりました。親になって20年、まだまだやることはたくさんあると思っていたのに、春からは面倒なお弁当作りも、朝怒鳴って起こすことも、他愛ない日々のケンカもなくなるなんて…。「子育てってこんなに短いんだ…」と驚き、ちょっとショックを受けました。

今年の表紙を飾ってくれた岸本くん、あなたが親元を離れる決断をした時、正直親御さんは「せいせいした」と思った瞬間があったかもしれません。でも、あなたに北星余市を助めてくれたこと、経済的にも大変な思いをしながら送り出してくれたこと、何よりあなたの幸せを誰よりも願ってくれていたこと、背景や事情は違っても、私は北星余市に我が子を送り出したあなたの親御さんの気持ちが、今わかる気がします。

海を隔てる北海道は遠いです。何かあってもすぐに飛んでいくことが出来ません。「陸続きではない」という現実是不安を増大させます。だから親は、ただひたすら我が子の健康を願い、幸せを願うのです。再会するときの笑顔を想像しながら…。細かい想いはたくさんあるけれど、とにかく我が子が幸せなら親も幸せなのだと思えます。

昨年の勤労感謝の日、東京の長女から「御礼」ののしが付いたビールが送られてきました。思いもかけない贈り物でした。添えられた手紙には「共働きで頑張って育ててくれたことへの感謝の気持ち」が綴られていました。仕事と家事・育児の両立（といってもずいぶん手抜きでした）の20年、自分の人生の選択に間違いがなかったことを娘が教えてくれました。大晦日、20才になった娘と乾杯したビールは最高級の味でした。（え）

計報

お悔み申し上げます。

教員 伊藤 英博先生 11/18

同窓会員奨学金について

今年度は卒業生のお子さん3名が奨学金を受けました。

杉船 夕子さん（旧豊野）	二七期	一年	翔大くん
佐々木博一さん	二〇期	一年	耀平くん
長尾 正明さん	三期	三年	ひなよさん
長尾 忍さん（旧川端）	二六期		

Shiripaの星

Vol.13
2014年1月1日発行

【発行】北星学園余市高等学校同窓会「シリパの星」編集委員会
〒046-0003 余市郡余市町黒川町19丁目2番地1
TEL(0135)23-2165 FAX(0135)22-6097
URL <http://www.hokusei-y-h.ed.jp/>

顧問 塚原 治
編集長 松村 悦子(15期)
副編集長 松浦 一法(12期)
編集委員 安藤 栄子(1期)
本間美智子(5期)
馬場 希(12期)
平野満寿美(14期)